

《創作落語》

膏こう育こう(育もつ)

吉元昭治

(1)

えー、あいかわらずの、ばかばかしいおはなしでおそれ入ります。

たいてい、落語と申しますのは、横丁の御隠居、大店の少々いかれた若旦那、それに何を業わざとして居るのかよくわからない、裏長屋にすむ、熊とか八とかいった登場人物で、すべてがまかないで居る便利な処ところがございます。この代名詞的な人物で、状況設定ができるわけですが、これらの人々は、みな典型的な江戸っ子でして、少々足りない頓馬のところがあり、気が早いのですが、心の中は全くの善人として、威勢いきせがよくても、情なさけにもろいといった面がありました。

今日も今日とて、長屋の熊さん、何かないかなあとおもって町内をぶらついて居るうちに、横丁の御隠居の家の前にきてしまいました。

あれー 御隠居のうちだね、このあいだ人がいつてたが、御隠居のうちについて、風鈴をほめたら、わけはよくわからねえがいつも羊羊かんなのに、虎屋のでかい羊かんを出してくれたといつてたな、そうだーつ風鈴をほめて、ごちになろう。

熊「えー ごめんなさって」

隠「おや、だれかとおもつたら、熊さんじゃないか、さあおありがたい」

熊さん、勝手しつたる他人の家といつたあんばいに上りこみ、しきりに窓の方をきにしてながめています。

隠「おや、どうしたね、雨でもふるつという寸法かい」

熊さんよくみると風鈴がみあたりません。

熊「御隠居さん、羊かんは？」

隠「熊さん、何かえ、羊かんをたべにきなすつたのかい」
そこへ、べっぴんの娘、実は御隠居の親戚で、在所から行儀見習いにきて居るのですが

熊「いえ、羊かんじゃないのですがね（おや、やはりこりや羊かんだよ）」

えーと、窓からぶらさがって、風がくるとなるものは何んだっけ、ぶらさがっているといつたって提灯じゃないし、風がきてなるものといつたって、子供の風車ふうぐるまじゃないし、あ、おもいだした、風鈴だ。

熊「風鈴ですよ。御隠居さん、お宅の風鈴は有名ですよ、町内だけ一人しらねえものはいやしませんが。かくしたつてだめですぜ、今晚あたり、誰れにもしらねえよ、こつそり、しんねりのチンチロリンでけしよ。虫の声をききながら風鈴とはね、この果報者、にくいよ、チンチロリンのチンチロリン、もう一つおまけにチンチロリン、さあ早く出しないやさ早くださねえか(この処、歌舞伎調できどる)」

隠「熊さん、そう大きな声で、きどることはないよ、お前さんも八のように、あたしがなにかい不倫をしているというのかい、わたしももうこの歳だ、不倫などできつこないよ」
熊「何をいませら、御隠居さんの風鈴は町内じゃしらねえものはなし、しらぬは、けちな御隠居はかりなり」

隠「困つたねお前さんによくはなしてもわからぬだらう、まゝ仕方がない」

といつて、うしろの茶だんすから、黒光りする、つやつやの羊かんをとり出します。

能「ほらね、初めから出せばいゝのに、よつがす、おれも男だ、まだだれか羊かんをたべにくるやつがいるかもしれなから、もう金輪際、風鈴のことはいいませんよ」

隠「お、そつしておくれ、全くお前達にあつちやかなわな」

熊「ところで、こないだ鍼師の一本齋先生にあつたら、こ

れから川向(かわむかい)(註、江戸時代、下町からいつと、隅田川の両国橋をわたつた対岸を川向といつた)の回向院(えこういん)の杉山神社でえとこに月一回のお詣りにいくところだといつていやしたが、なんですかい、その杉山神社といつのは何か御利益があるんで」

隠「あゝそつが、流石(さすが)に一本齋先生じゃ、その杉山神社とはな、鍼の元祖、杉山検校をまつつてあつて、鍼を業とする人ならお詣りするところだ」

熊「なるほどね、あつしも一つ利口になりやした。そのとき、あつしが少しかぜぎみだといつたら、先生、変なことをおいでしたよ。なんでも『病、肛門に入る』といつて、そつなつたら危いつてね。するてえと、毎日便所にもこわくていけやしねえ」

隠「それは、お前さんの開きちがいだな。昔、唐の国の古い言葉で、『病、膏盲(こうもう)に入る』といつて、もう命も風前の灯(ともしび)というわけだ(御隠居さんも膏盲とまちがえている)

熊「なんでも知つているね。ついでにききやすが、子供にチリケの灸をよくしますが、そのチリケとは何んでやす？」

隠「うーん。それは、それは、つまりチリとケというのが正しい」

能「そのチリとケとはどなんもんで」

隠「塵毛のことだね」

熊「それは？」

隠「子供の毛はチリチリしているだろう。だから塵毛だ」
熊「まあいいや、とここでこのさきに、近頃、あたらしいお医者ができたでしょう」

隠「うん、なんといつたつね。弁天堂直治先生とかいいなざる方らしいが」

熊「その直治先生ですがね、あつしや何処かでみかけた顔だとおもったら、いつか嬢かみめにたのまれ、朔日丸つひたひのまる（註、中條流などにあつた、避妊通経劑、一日にのむと効ありとされた）を日本橋町（註、昔より薬問屋が多かつた）の生薬屋せいやくやにかいにいきやしたが、その番頭ばんとうなどで、驚いたの、なんの」

隠「そつだな、近頃、よく変んな医者かはやるらしい。（註、素人が医者に変身する例がよくあつた。評判はどうだね」

熊「それが、このめえ、前を通つたので、しばらく眺めていたら、でてくる病人がみな同じ薬袋やくふくをかかえているので、おかしいとおもつて、うわさをさぐると、頭がいたくても、はらを下しても、月のさわりの病でも、子供のひきつけでも、なんでも、葛根湯とかいづくすりを出すといつことさあ」
隠「それでよめた。散歩のついでに、先生の家の前をとおつたら、だれかのいたづらがきで、軒先きに、

『葛の根で、やぶの林に蔵がたち』
とあつたな、それでも病人がくるのだから医者をつ三日した

ら、やめられぬとはよくいつたものだ」

隠「ところで、熊さんや、羊かんのついでというわけじゃないが、今日は用事をたのまれておくれ、あいにくお灸お灸のもくさをきらしたので、かまやのお灸（註、現在の茅場町あたりにあつたとされる）までもぐさを買いにいつておくれでな
いかい」

熊「こつみえても、用事というものが、こればかりもねえといつのが、あつしのとりえでして、よつがす、一寸しとつぱしりいつてきやしょう」

と、いせいよくとび出した熊さん。

もし、このおれが灸などする名人になつたら人助けができるのだがなあ……。夜、柳原土手（註、銭形平次などのはなしにもでてくる、現在、JR神田、秋葉原間で、神田川をわたる、神田よりの岸下流に柳原土手がある）などを歩いているとおもいねえ、ひよつと気付くと、特別あつらいのべっぴんな御新造（註、町家上流のおかみ）か、いきな姐さんが、路端でつづくまり、緋ちりめんも夜目にはつきりみえ、病でつなつてゐる寸法だ。

よくよくみるとこれが、すこぶるつきの別びんときてらあ。そこで、おれは、こちさんの狐か狸（註、この柳森神社は狐と狸をまつつてある）とおもつてしまい、つい

もしもし、ねえさん、どつなさつた。ひよつとすると、油

あげをくいすぎて、あたりなさったかえ。

ときくと、声も立てられねえで、頭をぶるねえ。そこで、狸の好物はとおもったがよく分らねえから、それじゃ、ねえさんは麻布から来なさったかえ、ときくと（註 麻布に狸穴まみあなという地名がある）、それでもななさったので、おれも、女のうしろをみて尻尾がななさったので安心するということ法だ。おれはもう立派な鍼師だから、つばを心得ているね。そして（気取った声で）、もしもし、どうなさった、といった調子できくと、女は、あい、ここまできると急にさしこみがきて、苦しくてたまりません。すると、おれは、それはお困りで、なにちつとも御心配には及びません。こちとらは、この辺りでは、ちよつとは名のしられた、熊じゃない、えんと、一本齋板いたい井大先生と申します。治してしんぜよう、てなことをいっちゃって、ここでもない、あすこでもないと、いたむ処をさする仕事をして、ついふところの手がすべったようにして手を入れると、あれーとかいって身をもだえるね。このおれは、糺のツボをしているから、えーっと気合を入れると、さしもの痛みもきえてしまふよ。すると女は、涙にぬれた大きな目で、じつとおれをみつめ、おもわず手をにぎり、

「ほんにおせわになりました。御礼といっちゃなんですが、ぜひ私の家においで下さい。」「ここにあげたく存じます。」「なんて、可愛い口からとび出すよ、おれは、なお氣取って、

いいえ、なんの、医者としてあたり前のことをしただけです。というと、女は、そんなことをいわずにさあどうぞというから、おれはまた、いやいやというよ、またどうぞ、というにきまつてら。「いやいや、どうで、いやいや、どうで、それでははいはい」「てな調子で、ついていくと、黒板塀に見越しの松といったおあつらいの家につく。すると女は白魚のよつな指で、いきに横座りになって、私の酌じゃ御不満でしょうが、まあ何もありませんが、おひとつ、とかいって盃に酒をつぐ、おれがぐいーっと一気へのむと、御返盃を、とくるね。こうして、さしつ、さされつしていると、急に雷がゴロゴロ、ピカッとおあつらいにへらあ。するとえと女は、あれ、こわいというて、このおれにすがりついて、今日は誰れもいません。こわくてねむれませんから、どうかよかつたら泊まっつていって下さい、というにきまつている。おれの鼻の下は、ドンドンのびて、あれ、鼻水がでたよ、すがりつく女のうなじのおくれ毛をみていると、おれも風鈴で、チンチロリンで、

（このとき石につまつく）ステテンコロリン。」

通行人がこれを見て

通「おい、あれをみねえ、あの変な野郎。さつきから口でブツブツいっているとおもったら、チンチロリンのステテンコロリンといっけてつまついて、目を廻しているよ。もしもし貴方どうなさった。大丈夫かい？」といっけてたすけて立た

せませす。熊さん はつと気付き

熊「なんでおこしやがった。これからいいところなのに、つづきをみようといつて道にまた「ロン」とよこになります。

通「もしもしいけませんよ、道でねてしまつては、どうもこまつたもんだ。目がつつろで、血ばじつて、口からよだれをだしているよ」

通2「頭にわらじをのせてみるか」(註 当時信じられていた意識障害のまじない)

通「もしもし、一体何処に行くつもりです」

熊「私はだれ? こゝは何処?」

通「何をきどつているのだろつね。こゝは中野村の鍋屋横町(現 中野区)で、有名なお祖師様(註 杉並区堀の内、正しくは日蓮宗、妙法寺、今でも参詣の人がたえない)の近くですよ」

熊「鍋屋横町に用があつたつけ、これも仏様のおみちびきが。有難たや、有難たや」

通「なんだねえ、こんどは手を合わせているよこの人は」

熊「ところで、なべやといつまべさをうっている店は、どいやせんか?」

通「なべやのまべさ? きいたことがないねえ、こゝは街道すじ(註 青梅街道)だから馬はよく通るが、まべさをうっている店はないよ。いったい貴方はどこから来なすつた?」

熊「よくぞ、きいて下さつた。あつしや神田から」

通「そりや、えらいまた遠いところから、四谷見附、内藤新宿(註 いまの新宿)、成子坂なるこさかをとおつてきなすつたのだね。

で神田はどこでいなす?」

熊「よくぞきいて下さつた。はなせば長いことながら、神田は神田鍛冶町角の乾物屋の勤兵衛さんの所でかち栗買つたら固くてかんでもよくかめない」

通「はなせば長いどころか、はやくちことばだね」

熊「その勤兵衛さんの前の通りを入ると伊勢屋があります。町内に伊勢屋というのれんが三つもありますが、ごうよく伊勢屋といえはすぐわかります。その横にお稲荷さんがあります。これも町内に五つありますが、赤鳥居がはけて黒鳥居になつていたので、だれでもわかります。ですが、そこらは犬だらけで、このあいだも犬の尻尾をふんで、ひどく追いかけられた人がいましたから気をつけなすつて、その裏の長屋の右から三軒目があつしの家で、熊と申しやす」(註 江戸に多きもの、伊勢屋、稲荷に犬の糞という言葉があつた)

通「こまつたね、こんどは泣いているよ。よく憶い出して下さいよ。こんな遠くまで、何を買いに来なすつた?」

熊「え、その、御隠居にたのまれて、なべ……、なべじやない。なべぶたにとじぶたでもない。おや、お前さんのもつているものは何んでしたつつけ?」

通「これは、草をかるかまですよ」

熊「あつそれだつ、かまやだ」

通「それで、そのかまやさんに何んの用事で？」

熊「そこで、クエスチョン、かまやといえは？」

通「おやおや、こんどはなぞかけかえ、かまやといえは子供も知っている、もぐさやさんだ」

熊「なんだ、知っていれば早くなぜいわねえ、さんざん人をじらしやがって」

通「そりゃこちらの科臼せしうだよ。全くおかしな人だね。江戸を東と西をまちがえて来て来てしまったのだから、早く帰らねえと曰いがくれてしまつよ」

あわてた、熊さん、急いで今きた道をひきかえします。

膏育(膏) 2

翌日、御隠居のうちにいつて、こつこつしかじかとはなしで、笑われるやら、さんざんな熊さん、御隠居から灸すえのすえ方や、つばのおし方、按摩の方法をおそわりました。

もとより気の早い神田っ子のこと、飛ぶよつにして家に戻ります。

熊「いま帰えつたぜ」

嬢「おや、どうしたい、めつぼつ今日は早いね、熱でもあるのかい、腹でもいたいかい、それとも、やつちやば(註)

須田町にあつた、青果市場、今は秋葉原にあり、大森方面に移転)の若い衆にまた、なぐられたのかい」

熊「お前はおれが一ついうと、三つも四つもべらべらいうね、今日はよいことを教えてもらつてきた、早くふとんをひいて、横になりねえ」

嬢「まあ、いやだよこの人は、まだおてんとうさまがでているじゃないか、もしだれかにみられたら恥しい……でも、めずらしいことだから待つておくれ、すぐひくから」

熊「べらぼうめ、何をかんちがいしているんだい、ちがうの、御隠居さんに指圧や按摩のしかたを教わつたから、忘れねえうちのためにしてみようとしただけでえ、このうすらトンカチ」

嬢「おや、そうかい、ちようど、井戸から水をくんでもどるとき、腰をいたくしたらしいんだよ、早くもんでおくれ」

熊さん、早速、かみさんを実験台として、汗水をたらしているところに、息子の伴太ばんたが帰つてきました。

熊「おや伴太、いまかあちゃんか腰がいたいというから、按摩をしているから、もう少し外で遊んでおいで」

伴「うん」、伴太は外に出て、御隠居の家の前にきますと、御隠居が伴太をみて、

隠「おい、伴太じゃないか、何をしているんだい、早く帰らないと、人さらいがでてくるぞ」

伴「でもね、いま、とうちゃんが、かあちゃんの上につかかって、こわい顔をして、かあちゃんを圧えつけていると、かあちゃんが下から、いたい、いたいようと泣き声をだすんで、かわいそうなので、みていると、こんどは、気持ちがいい、気持ちがいい、そこそこ、もつと、もつとだよ、なんていつているから、つまんないので、外に出てきたんだ」

隠「あの野郎、いいかげんにひる間から何をしていやがるんだろ。少しは子供の手前を考えるといいよ」

「このようにワイワイ、ガヤガヤ、今日も、平和な江戸の下の町の一日がくれていきます。」

話かわって、やはり神田でも有数な大店の若旦那、遊びという遊びはすべてしつくして暇で暇でたまりません。このよくな手あいには、同じような取り巻きがいるもので、わが熊さんのとなりの八ッあんもまさにその一人です。

若「あ、ひまだなあ、なんの因果でこうひまなんだろう。」

きつといまにひまににくい殺されてしまつよ。くつやおはらいのウチにひまやお母さんのウチのな商売があつたらしいの、すくてえと、ひまを買つてもどうのではななくて、こつちからひまにのしきつけて送つてもどうのでもどうのね。それも一貫、一貫とどうのではなくて、百貫くらゐのひまだから、むこうも田を買つたろつな、その百貫に金をつけてあげちやうの

だからいいお得意様だ。それでなければ、ひま大王とかいて地獄の閻魔様の弟分のようなこわいのがでてきて、この世でひまのあるやつはひとつとらえるぞなんていうね、すると、わつちなんぞはその親分みたいなもんだから、一番さきに、ひとつとらえられて、ひま地獄つてなところにおとされ、もつとひどいひまで苦しめられるよ、あ、いやだ、いやだ、わつちのように、ひまがあつて、金もあつて、十人以上の男ぶりなのにとつてこうもてないんだろ。」

「おひまならきてよね。私さびしいわ。」

「なんていうのに。」

「おひまなら、行くわよ、私うれしいわ。」

「なんぞといつてくれる女の子はいないかな。」

少し外にでてくるか。とかいつて、近所の古本屋をひやかしていでに、『はり、きつ伝授書』とていつのをかつてきます。

若「うむ、これは面白そうだが、なにに第一頁はてえと、

鍼をつつには鍼をかえ、なんだいこりや、あたり前じゃないか、さてお次は鍼をするには鍼をさせ、しまいは、わつちもおこるよ。」

次は鍼の極意とあるね、これはきつと大事なことがかいてあるよ。

何事にも初体験のおりは、おそろしくいたがるものなり、ゆめゆめ手荒くすべからず。くりかえすうちにはなれて、い

と心地よくなるものなり。病人、さらにもつと、もつと、氣持ちよければなり、と申さば、鍼も達人の域に達したというべく、この儀におよんだるものは、免許皆伝なり、これ鍼の極意というべし。

ふん、なるほどね、なんだか、わつちの大好きなことに似てるね、わつちはあの方の達人だから、鍼もきつとつまくなるにきまつていらあ、そのうちひる、夜の両刀使いの達人になるかもね。

とこで、鍼は手許にないが……、そうそう、頭も使いよう、ぬい針というものがあつたけ

ちようど、この時、かい猫の虎が前をとおります。

若「うまい、おあつらえた（虎、虎ちゃんや、あとで、かつぶしあげるから鍼をつたしておくれ」

何をかんちがいたのか、虎はぴよんと、若旦那のひざの上で、ごろんと横になります。

若「おやお前どつした。いやに「コロコロ」ってっているね、こりゃ喘息というものだよ、苦しいだろう、よしよしいますぐらくにしてあげよう」

とかいって、ペラペラ本をめくり、喘息の処をさがして、若「喘息には、背中の肺俞につつべし。とあるな、肺俞とはこのあたりかな」

と、虎の背中にぬい針をさしますと、虎はギャーッ

と、逃げだします。

若「やはり、初体験はいたんだね、猫はだめだよ、ちつともおとなしくしないじやないか、やはり鍼は人にかぎる。そうだ、長屋の八つあんにたのんでみよう」

途中、鍼の店によって最上級の金鍼をかって用意万端ととえました。

若「八つあんいるかえ」

八「御目前（おめまえ）にかしこまつて候、若旦那、いつみてもいきだねえ、きまつているよ、これだから町内の女子衆もただでおかねえわけだ。いよう、町内の玉三郎、まずは、ずーいと奥に」

若「奥へといつたつて、お前さんちじや、奥にいつたら、とおりぬけて、むここの路地にとび出しちゃうよ。今回はお前さんにたのみがあつてきたんだよ」

八「おつと、最後までいいなさんな、こちとらは、ははかりながら、若旦那のためなら、たとえ、火の中、水の中でもこちやいとせんわいなでさあ、いつてえとこのどちやつで喧嘩の相手は、それとも討入で、義をみてせざるは勇なきなり、先祖伝来のこの包丁、あれ、いやに錆（さび）てるね、いますぐ磨（みが）きますからな」

若「なんだね、そんなぶつそつなことじゃないんだよ、お

前さん鍼をつつたことがおありかえ」

八「自慢じゃありやしませんが、この八五郎、神田川の水でうぶ湯をつかつてからこのかた、医者敷居をまたいだことが、ただの一度だつてありやしやせんや」

若「それじゃ、わたしに鍼をつたせておくれ」

八「ええ、鍼つて、あの病気のときうつ鍼ですけえ？」

若「そつだよ、でもわたしじゃ、決してただとはいわないよ。一本つたせてくれたら一分あげよう」

いつか、若旦那が、新内の独演会を寄席をかりきつてやつたので、義理にからまれ行つたが、若旦那「明烏」をつなつたね、あれは、うたつなんてしろものじゃないよ、あの声は人を呪い殺す声だよ、でも、何かかけこえをかけなきゃいけないとおもつたもんだから、女義太夫よろしく、「どうする、どうする」(註 女義太夫で興奮した客がいうかけこえ)と大きな声でいつたら、若旦那「こつする、こつする」とかいつちやつて、ふところから、金をつかんで、みんなにばらまいたつて。

八「といつてえと、一本一分なら、二本で三分ですかい」

若「そついつ勘定になるな」

八「二本なら」

若「三分だよ」

八「もし百本なら」

若「そりあ、はりねずみだね、百本なら一分の百倍ぞ」

八「やります、やります、やつて下せえ、さつきもいつたように、この体、若旦那に命あつけます。どうぞ、にるなり、やくなり、御勝手に」

若「こりや、八つあん、金の鍼だよ、高いからねえ」

八「えらい、若旦那、みあげたもんだね、高い鍼ならそれだけ験があるといつもんだ。たんとやつておくんせえ。一本、二本なんて、けちなことはいわねえで、束にしてやつてくんね」

若「八つあん、何処か痛いところでも、特にないかい？」

八「そつでがすねえ、この前から、痔があるよつで、色氣と痔氣のないものはねえといひやすから」

若「あゝそつかい、一寸まちな」

といつて、本をまためくり、痔の処をさがします。

若「なになに、痔には長強につつべし、とあるな、長強とはこの絵によるとけつ穴の近くだよ、八つあん、けつをお出し」

八「そんな、あつしのけつなんて、とてもおみせするしろものじゃありませんや、そればかりは、ごかんべん、ごかんべん」

若「そつかい、じゃわつちが帰らせてもらつよ、そりや、一分じゃ帰られえなものに」

八「若旦那、まっつて下さいよ。困ったね、変なことをいつてしまつて、でも金にはかえられないし、えい清水の舞台からとびおりた氣になつて、ええ、よつがす、覚悟はできやした」

若「そうそうそれでこそ神田っ子だよ、その意氣、その意氣、ところごと、八っあんのけつは見事だね、どつちが前か後かわかりやしな」

八「若旦那、そりや、あつしの頭で」

若「どうも毛が長いし、第一、われめもないからおかしいとおもつたよ。どつれ、ひつくりかえつてと、なんだか初めのことだから手がふるえだしたよ」

八「本当に大文夫ですかい、心配だなあ」

若「ではいくよ、鐘は上野か、浅草か、ゴオーンと二つき」

八「いてえ」

若「これが初体験というものだな」

八「おそれ入谷の鬼子母神だ。あゝ一分だ、有難てえ、有難てえ」

若「ついで、一つ二つはめんどつたど」

八「これで三分だな、有難てえ、有難てえ」

若「みんなでさせばこわくない。それいけもつ一本」

八「いてえけど有難てえ」

若「よせばいいにもつ一本と」

こつして、三本、四本とつづけざまにさします。

八「若旦那、もつ何分になりやした」

若「まだまだ、そろそろ氣持ちがよくなつてこないかい」
金鍼ですから、よく曲つてしまい、とうとうぬくことができなくなつてしまいました。

若「おや、ぬけなくなつてしまつたよ、こついつときはどつしたらよいだろう」

ふたたび本をみると、このよふなときは、むかい鍼をうつとよいとかいてありました。

そこでもつ一本、

若「どつしてもぬけないよ、ひいてだめなら、おしてみな、あれつ、もつと入つてしまつたよ、困つたよ」

八「若旦那、どつする、どつする」

若「こつする、こつする、八っあん、これ金鍼だよ、みんなお前さんにくれてやるからな」

八「待つて下さいよ、あつしのけつにささつてゐる鍼はどつなりませう」

若「いま、これから巢鴨のとげぬき地蔵さんについて、おふだをもらつてくるから。とげをぬくから、きつと鍼もぬいてくれるだろう、はいさよつなら、こぎげんよつ」

八「やっぱし、熊のやつがいったとおり、病が膏肓(肛門)に入れば、もつおしまいだ」

(一)